

Thomas Hardy の *Jude the Obscure* に於ける現代性

——大学入学の機会均等と結婚・離婚の自由——

中 村 祥 子*

I. はじめに

先頃、『なぜ「日陰者ジュード」を読むか——ハーディ文学の新しい鉱脈を探る』¹⁾という新刊書の書評²⁾を書く機会があって、*Jude the Obscure*³⁾ (1895) (以下 *Jude* と略記) を再読した。『なぜ「日陰者ジュード」を読むか』も、*Jude* の今日的意義を「社会的歴史的視野から」(あとがき) 明らかにしようと試みた部分がとりわけ興味深い研究書であったが、今から100年前に書かれた *Jude* そのものが、少しも色褪せていず、感動を与える小説であるということを改めて認識できたことは、大きな収穫であった。

Hardy はこの小説を、50年後100年後(つまり20世紀末の現在の辺り)にどう評価されるかということを常に念頭に置いて書いていた節がある。ヒーローの Jude は 'It takes two or three generations to do what I tried to do in one' (V.i.) (大意 (以下同様): 僕が一世代でやろうとしたことを仕遂げるには、二、三世代(つまり約50~100年)かかるんだ)と言ったり、'Our ideas were fifty years too soon to be any good to us' (V.x.) (僕達の考え方は50年早過ぎた)と述懐したり、ヒロインの Sue も 'We are a little beforehand, that's all. In fifty, a hundred, years the descendants... will act and feel worse than we' (IV.iv.) (私達の行動や感じ方には少し時代に先んじているところがあるわ。だけど50年か100年経てば、もっとひどい状況になっていると思うわ) と言う場面

が描かれている。

このうち Jude のせりふは未来に対する或る種の期待に裏打ちされた確信として表現されているのに対して、Sue の方は、状況が将来ますます悪くなっているだろうという悲観的な見通しの下で言われている。従って二人のせりふは、100年後をどう見るかという点では根本的な違いがある。が、Sue もまだ反抗心に満ちていた頃には、'When people of a later age look back upon the barbarous customs and superstitions of the times that we have the unhappiness to live in, what *will* they say!' (IV.ii.) (もし後世の人々が、私達の時代の野蛮な習慣や迷信を振り返って見たら、何と言うことでしょう)と憤慨しており、当時の後進性を批判する立場に立っていた。

このように Hardy は、自分が作中に提示したテーマに関して、客観的な判定が下る時期の一つの目安として、約100年後を見据えていたということは明らかである。従ってその点では Hardy の同時代の読者より有利な地点にいる者の一人として、*Jude* のテーマを今どう評価できるのかについて、少し考えてみたい。

1) 安藤勝夫・東郷秀光・船山良一編 (英宝社, 1997年9月)

2) 『「ジュード」研究の現在——『なぜ「日陰者ジュード」を読むか——ハーディ文学の新しい鉱脈を探る——』, 新英米文学研究会『New Perspective』第167号掲載予定。

3) Thomas Hardy 著。引用は Pocket Paper-macs (Macmillan, 1966年版) を用いたので、ページ数ではなく、何部何章として示した。尚、訳はすべて大意である。

II. 'The letter killeth' (文字は殺す)

Jude には、epigraph として 'The letter killeth' という一文が掲げられている。これが小説のテーマと深く関わることは明らかだが、そのテーマがどういうものであるかは、この epigraph の出典を見ればかなり鮮明になる。

これは新約聖書「コリント人への第二の手紙」3章6節からとられたものである。この文の前後は、次のようになっている。

その神はまさに、私たちを新しい契約の奉仕者として、つまり文字の〔奉仕者〕ではなく霊の〔奉仕者〕として、十分に〔ふさわしい〕者として下さったのである。なぜならば、文字は〔人を〕殺し、霊は〔人を〕生かすからである。⁴⁾

先ずここで、letter は spirit (霊) と対に用いられた語であることがわかる。

更にこの部分は次のように続いている。

さて、石に刻まれた文字に基づく死の奉仕〔でさえ〕も栄光のうちに為され、その結果イスラエルの子らが、モーセの顔の壊されゆく栄光のゆえに〔すら〕彼の顔を見つめることができなかったとするなら、どうして霊の奉仕が、よりいっそう栄光のうちにあるものとならないことがあろうか。

つまり 'The letter killeth' は、コリント人への手紙の書き手パウロが、「モーセを消極的にしか扱って」ず、「モーセが受けたとされる神からの十戒は「石の板」に書かれた「文字」にすぎず、その「文字は〔人を〕殺し、霊は〔人を〕生かす」……とパウロ（が）語る」⁵⁾部分からの抜粋なのである。

こうした出典の事実は、たとえば作中の一場面——*Jude* が教会で十戒の銘文の修理を頼まれた時、正式に結婚していない *Jude* と *Sue* に当て付けて教区委員が一つの逸話、つまり別の村でも不信心な職人達が酒に酔い、その間に

悪魔が十戒すべての「勿れ」を抜いてしまった話を語る場面 (V.vi.) ——の意味をただちに思い当らせてくれる。つまり Hardy はこの場面を通して、モーセの十戒は石の板に刻まれた letter にすぎないのに、それらを信じる教区の人々が *Jude* と *Sue* とを迫害するということ、それはまさに 'The letter killeth' の典型だということを示そうとしていることがわかるのである。

更に 'The letter killeth' という文そのものが、小説のほとんど最後の場面で使われる。*Jude* が病を押して、死ぬ前にもう一度 *Sue* に会いに行った時、*Jude* 自身の口から述べられることになっている。この時には *Sue* は、教会で遂行した最初の結婚を、神の名に於ける真の契約だと主張して *Phyllotson* の元へ帰り、一方 *Jude* は *Arabella* に嵌められて彼女と結婚し直していた。その状態を指して *Jude* は次のように *Sue* に訴える。'Sue, Sue! we are acting by the letter; and "the letter killeth"!' (VI. viii.) (僕達は文字によって行動しているが「文字は殺す」だよ) と。*Jude* はこの認識を踏まえて更に、'We've both re-married out of our senses.... Let us then shake off our mistakes, and run away together!' (僕達がそれぞれに正気を失ってした再婚は誤りだ。だからそれを無視して二人で駆け落ちをしよう) と提案することになるのである。

従って、'The letter killeth' は、この小説に於ける Hardy の主張——*Jude* と *Sue* とが一緒になることが正しい選択だったという主張——に直結しているのである。つまり二人がそうならなかった悲劇の原因を説明している文だと言える。Hardy は epigraph と小説の最後とに、このように二度 'The letter killeth' を使うことによって、この小説が 'The letter killeth' という現象によって引き起こされた悲劇であるということを強調した、と見ることができるだろう。

ところで、letter が何を指すか、様々に解釈されることがある。が、これはあくまで聖書の出典の文章の通り、spirit と対照的なものとして

4) 青野太潮訳『パウロ書簡』新約聖書IV (岩波書店, 1997), 128頁。

5) 「パウロ書簡解説」(青野訳『パウロ書簡』), 251頁。

解釈されるべきである。つまり物事の本質的なこと (spirit) と、元はそれを表現する手段であったに過ぎない非本質的なもの (letter) という対照に於て、である。そうして見れば、'The letter killeth' という現象は (先程見た教区委員が逸話を語る場面のように)、Jude の生涯に幾度も起こり、Jude が letter によって殺されていく悲劇の意味がよく理解できるのである。つまり Hardy は *Jude* を、一度ならず letter に殺されてきた Jude が、最後に、直接には letter の信奉者に陥った Sue の迷信深さの故に、間接的には Sue をそこへ追いやった社会の慣習や因襲という letter の故に、陥る悲劇として描こうとしたのである。

III. 石工 Jude

A) Jude は少年時代に自分の職業を選ばねばならなくなった時、石工の仕事を選んだ。彼は Christminster (= Oxford) で学問を修めて神学者か聖職者になりたいという目標を持っていたから、この石工の職は 'prop' (つかい棒)、つまり 'trade or calling of...dignity or stability...on which he could subsist while carrying out an intellectual labour which might spread over many years' (I.v.) (長年にわたるであろう知的労働に従事する間、喰いつないでいける安定した職業) として、Jude が選んだものである。Jude のこの時の気持は次のように説明されている。

...therefore he would learn to build. He thought of his unknown uncle, his cousin Susanna's father, an ecclesiastical worker in metal, and somehow mediaeval art in any material was a trade for which he had rather a fancy. He could not go far wrong in following his uncle's footsteps, and engaging himself awhile with the carcasses that contained the scholar souls.

(彼は中世風の仕事に何となく憧れていたし、学者の魂を宿した、大学の建物に関わることができると点にひかれて、石工の職を選んだ。)

つまりこの石工という職は、中世趣味の雰囲気

気をもつ仕事、具体的には教会建築や学寮の建造物に関わる仕事として設定されていることになる。

Jude は North Wessex の田舎で石工の徒弟修行をした。そのために、何かを専門に彫るというのではなく、何でも一通りはこなせる汎用タイプの石工になった。その間にまた彼は教会建築家の所で教会の石造建築を修復する術も身につけた。

こうして22歳の頃に徒弟奉公を終えた Jude の、石工としての特徴は次の二つにまとめられる。一つは一応何でもこなせる器用さを持っていたこと、もう一つは彼の扱える建築様式はゴシック建築であったことである。Jude のこの特徴は、作中繰り返し指摘される ((II.i.), (II.iv.) 等)。

B) 従って Jude に最も適った仕事は、ゴシック建築の修復ということになる。それは具体的には、一つは Christminster の古い中世式建築物の修復作業である。(そしてもう一つは、後述の教会修復作業である。) Jude は初めて Christminster に足を踏み入れて、10年来夢に見た町を夜一人で、学寮から学寮へとさ迷い歩き、一夜過ぎた昼の光で改めてその古い建物群を見た時、この町の特徴を客観的に次のように観察する。

It was, in one sense, encouraging to think that in a place of crumbling stones there must be plenty for one of his trade to do in the business of renovation. (II.ii.)

(石造りの建築物のあちこちには崩れがあるのが目について、修理の仕事がたくさんあるに違いないと思うと、彼は心強かった。)

この確信の下で Jude は Christminster に住み始める。しかし石工としての仕事はすぐには見つからず、毎日仕事を探しに出掛けて、やっと石工の仕事場に口が見つかったことになっている。こうして作者は、学寮の壁そのものの厚さもさることながら、一日中働いた後で夜の大部分を読書に費すという生活を維持すること自体が、Jude のような田舎出身の職人にとっては、大変な苦勞であったことを強調している。

更に作者は、この Christminster 大学の学寮修復という仕事を、‘that [effort] dignified by the name of scholarly study within the noblest of the colleges’ (II.ii.) (大学内部で、学問研究の名の下に威厳をつけてなされていること) と対比し、石工の仕事の方が、町の真の再生の中心であると言っている。但しそれは模倣と修繕という性格のものに過ぎないけれど、と。そして続けて Hardy は次のように説明する。

He[Jude] did not at that time see that mediaevalism was as dead as a fern-leaf in a lump of coal; that other developments were shaping in the world around him, in which Gothic architecture and its associations had no place.
(その時には Jude はまだ、中世趣味やゴシック建築が、もう時代遅れであるということに気付いていなかった。)

つまり Jude はこの時点で、Christminster に二重に幻惑されていることになる。一つは、大学内部でなされている学問研究を、Jude は石工の仕事よりも価値あるものと考えていること、もう一つは、時代遅れで過去の偉業の単なる懷古に過ぎない中世趣味やゴシック様式に憧れていることである。前者の幻想については、学寮の内と外とを隔てる越え難い壁(階級の壁)の意味とその厚さを現実的に悟らされた時、彼はそこから覚めることができた。

しかし後者の幻想からは、それがゴシック様式のもう一つの建物、つまり教会そのものと結びついているために、敬虔なキリスト教徒である Jude はすぐに覚めることはできない。Jude がこの幻想からも徐々に覚めていくことが、彼のもう一つの夢、聖職者になる夢から覚めることと並行して、次に描かれることになるのである。

C) Christminster から Sue を追って移った Melchester では、Jude は次のように描写される。

He took it as a good omen that numerous blocks of stone were lying about, which signified that the cathedral was undergoing

restoration or repair to a considerable extent.
(III. i.)

(多くの石材がそこらに置かれているということは、この大聖堂が大々的に修復されようとしているわけだから、彼には仕事の口があるという良い徴候に思えた。)

勿論ここでも、Jude はすぐには望む仕事に就けず、ようやく大聖堂の修理の口を見つめることができた。このように、この時点では、Jude は Christminster の学寮の建物の代わりに、教会の建物と取り組んでいるに過ぎないことが示されている。

しかしこの時期には、一方で Jude は ‘I hate Gothic!’ (III.ii.) (ゴシック様式なんて大嫌い) と明言する Sue とつき合い始めており、彼女にひかれる Jude は徐々に Sue の影響を受けて変っていく。また Sue が Phillotson と結婚してしまうことも含めて、現実生活で出会う幾つもの幻滅から、Jude はキリスト教信仰そのものにも懐疑的になっていく。例えば、彼を深く感動させた新しい賛美歌の作曲者に、わざわざ会いに行ったにもかかわらず、その音楽家が全くの俗物であるとわかった時に Jude の味わった幻滅がそれである。その遠出は、Sue からの招待の手紙と行き違いになっただけに、一層 Jude を悔ませた。その時 Jude は一瞬、これは神が Sue から遠避けるための特別な計らいだったと思い、心慰めようとする。が、神が人間に無駄足を踏ませるという考えなど彼には馬鹿馬鹿しく思え、宗教という名の残酷な縛りの意味を考え直そうとしている。

D) こうした信仰への幻滅や、信仰が自然な感情と衝突する瞬間が幾つも重なった後、遂に Jude は聖職者になる夢を捨て、Sue と駆け落ちする。その時駆け落ち先で Jude が就く仕事は、墓碑職人のそれである。近隣の貧しい人達が、死んだ身内のささやかな記念碑を建てたいと思った時、その墓石を作り、そこへ文字を刻み入れる仕事である。

仕事の格としては明らかに大聖堂の修理よりも劣ったものだが、この仕事の一番大きな特徴は、これが必ずしもキリスト教や中世趣味やゴ

シック建築と直接関わっていないということである。Jude は、そうしたものには距離を置き、自分の裁量でこなせる仕事を始めたと言える。誰かに雇われているのではないという点で、また Sue が Jude の仕事の手助けができるという点でも、Jude には気に入ったものであった。

作者もこの時期の Jude の生活を、石工としても、暫時安定したものとして描いている。二人は、Jude の表札のかけてある小さいながらも一軒の家を借りて住み、地方税、国税も払える位の収入があり、古いけれど先祖譲りの家具を備えることもできた。この時期の二人の到達点、農業博覧会に出品した、二人だけに価値のある合作、Christminster の学寮の模型⁶⁾として示されている (V.v.)。

E) しかし二人が正式に結婚していないことによって、この束の間の安定した生活もすぐに壊れてしまう。Jude が再び雇われの石工に戻らねばならなくなった時、直接には、教会修復工事から解雇されたせいでもあるが、⁷⁾ 徐々に教会そのものへの反発から嫌悪すら抱き始めていた Jude は、次のように言う。‘I am sickened of ecclesiastical work now; and I shouldn’t like to accept it, if offered me!’ (V.vi.) (教会関係の仕事にはもううんざりだ。たとえ頼ま

れても僕は引き受けたくない) と。それに対して Sue は ‘You ought to have learnt Classic. Gothic is barbaric art, after all’ (あなたはゴシック様式ではなく、古典様式を学ぶべきだったのよ) と答えるが、更に Jude は ‘But one can work, and despise what one does. I must do something, if not church-gothic’ (人間は自分の仕事を軽蔑しながらすることだってできる。僕も、教会のゴシック様式でさえなければ、何でも構わない) と言っている。

この対話で、Hardy はまず、教会への嫌悪をはっきり口にするまでになった Jude の変化の大きさを示そうとしている。更に、Jude と Sue との微妙な違いをもうまく表現している。例えば Jude は教会に関する仕事そのものが嫌だと言っているのに対して、Sue はゴシック様式、つまり中世趣味が嫌だと言っている。つまり Jude はこの時点で信仰に関してはほとんど不可知論者なのであって、その観点から教会に関わる仕事を一切拒否しようとしている。従って彼は、たとえ自分が軽蔑するようになったゴシック様式でも、教会関係のものでさえなければ、それを仕事と割り切ってやらねばならないと言っているわけである。即ち Jude はキリスト教の教義そのもの (spirit) と中世趣味やゴシック様式 (letter) とを分けて考えており、spirit に対して拒否の姿勢さえ貫くことができれば、letter にはこだわらない、と言っているのである。

それに対して Sue は、キリスト教の教義そのものを問題にするのではなく、ゴシック様式という letter にこだわっており、ゴシックは拒否するが、いわば別の letter である古典様式なら構わないと考えていると言えよう。

こうした二人の微妙な違いが、後に一層拡大されていくわけである。

ところで、もともとの出発点として、ゴシック建築の修復に一番腕の発揮できる石工であった Jude にとって、教会忌避の立場に立つとすると、仕事そのものの巾がかなり狭められてしまう。Jude が次の二年半の間に、Sue や子供達と共にあちこち渡り歩いて従事した仕事につい

6) ちなみにこの模型は二部五章で Sue が軽蔑したエルサレムの模型と対になっている。この時 Sue は、それがうまく出来てはいても空想上のものに過ぎない点と、エルサレムには古代都市のような雰囲気は全然無い点とを批判した。一方 Jude はその模型が過去へと誘ってくれと単純に感嘆していたのだが、Sue の批判に会って、思わず彼女の意見に同意してしまう。この時点での二人の位置は、Sue がはっきりと反中世・親古代であり、Jude は彼の‘光のエルサレム’(=Christminster) が、自分の空想とは異なることを認識し始めていた頃、つまり Christminster の本当の姿に気が付き始めていた頃であった。

それに対して、この農業博覧会の時点では、Sue の反中世・親古代の姿勢は、むしろ反文明と言えるものであり、一方の Jude は文明すべての否定でなく、一定の進歩の側面(農機具や学寮の形にさえも)を認めようとしている、ということが示されている。

7) 小さな教会にある十戒の銘文の修理を頼まれた時の、前にも触れた事件 (V.vi.)。

て、Hardy は次のように描写している。

Wherever Jude heard of freestone work to be done, thither he went.... Sometimes he might have been found shaping the mullions of a country mansion, sometimes setting the parapet of a town-hall, sometimes ashlaring an hotel at Sandbourne, sometimes a museum at Casterbridge, sometimes as far down as Exonbury, sometimes at Stoke-Barehills. (V. vii.)

(彼は、石灰石加工の仕事、田舎の邸宅の窓の縦仕切りをつけたり、町の公会堂に手摺をつけたり、ホテルや博物館に切石を張ったりする仕事があれば、遠くへでも出掛けた。)

つまりこの時期 Jude は、石工としての彼のもう一つの特徴、何でも屋という面を最大限生かしたわけである。

が、Jude が徹底して教会仕事をしていない点が重要である。勿論、品行にうるさい教会側が、Jude のような流れ者には仕事をさせないという事情があったかもしれないが、Jude の方も「頼まれても引き受けたくない」という上述の姿勢を貫いている。

His curious and sudden antipathy to ecclesiastical work...remained with him in cold blood...from an ultra-conscientiousness which would not allow him to seek a living out of those who would disapprove of his ways....

(Jude は自分の生き方を非難するような人々に、生活の資を求めるのを潔しとしない気持から、教会仕事への反感を貫いた。)

ここでも Jude の誠実さがよく示されている。

しかしこうした生活は、先ず放浪生活が前提になっているので非常に不安定なものだし、もともと建物内での修復作業が専門の Jude には向いていない。彼が或る音楽ホールの仕事を期日までに仕上げようと雨の中で作業をしたために、風邪をひいて身体をこわしてしまうということがたとえ無かったとしても、いずれは終止符が打たれる生活であった。

F) その後 Jude は大伯母から教わっていたパン焼きの腕を生かして、生姜入りパンを家の中で作り、Sue が市や縁日の屋台で売るとい

ことを思いつくが、このパンの形に、Jude の石工としての特徴が生かされることになる。つまり学寮の狭間付き窓や回廊や塔の形をした、Christminster cakes と名付けたパンを Jude は作るのである。Jude がこうした形のパンを作ることにについて、多くの批評家達は (Arabella と同じように)、いつまで経っても Christminster に執着した、Jude の未練ととらえている。その点では Sue でさえ 'He still thinks it [Christminster] a great centre of high and fearless thought, instead of what it is, a nest of commonplace schoolmasters whose characteristic is timid obsequiousness to tradition' (V.vii.) (あそこは本当は、伝統にこびたつまらない教師達の巣なのに、Jude は今なお高尚な思想の中心地だと考えているの) と述べることになっている。

しかし Hardy は、これを必ずしも Jude のそういう側面を示すものとして描こうとしたのではない。仮に Jude にとって、今でも Christminster があくまで「高尚な思想の中心地」であったとしても、パンの形をしたゴシックの建物は (成程、一頃の Jude にとっては、それは中世趣味と一致するものだったかもしれないが)、最早「高尚な思想」の象徴ではなくて、Jude を撥ね付けた大学の権威と同じく、ただの letter に過ぎないことを、彼は見抜いているのである。従って Jude は本来の Christminster の形骸に過ぎないものを、文字通り喰いものに仕立てることができたのだと言えるだろう。かつて「石工 J. Fawley 殿」宛に、'I venture to think that you will have a much better chance of success in life by remaining in your own sphere and sticking to your trade...' (II.vi.)

(石工の職に専念された方が、成功の見込みがあるでしょう) と「忠告」してきたあの学寮長が、もし自分達の学寮の形がパンになって縁日の屋台で売られていて、しかも市の人気商品であると知ったとしたら、本来の学問の spirit と、それから派生したに過ぎない権威や形式との区別がつかない彼らには、恐らくそれは学問そのもののへの冒瀆と思えるのではないか。一方 Jude

は、かつて Sue が表現した、‘intellect at Christminster is new wine in old bottles’ (III.iv.) の意味を今や完璧に理解している。彼は「古い革袋」をただ生活の資を稼ぐ手段として利用しているに過ぎず、それは必ずしも「新しいぶどう酒」への執着の深さを示すものとは言えない。

更に第六部で Jude が再び Christminster へ戻ることに關しても、同様のことが言える。多くの批評家達は、それも Jude がいつまでもこの町に執着している表れだと批判的だが、Jude のようなタイプの石工で、教会以外のゴシックの修復と言えば、結局学寮修復の仕事しかないと Hardy は言っているのである。Jude が作中で実際に仕事をしている場面として最後に描写されているのは、次の場面である。

...he daily mounted to the parapets and copings of colleges he could never enter, and renewed the crumbling freestones of mullioned windows he would never look from, as if he had known no wish to do otherwise. (VI.iii.)
(まるでそれ以外の仕事をしたいと思ったことがないかのように、彼は毎日学寮の修理作業をした。)

ここで Jude は確にかつて第二部でしていた仕事と同じことをやっているのだが、Jude にとってそれは最早同じ意味を持たない。彼はここでは、ゴシック建築修復専門の石工の、単なる仕事の一つとして従事しているに過ぎない。そして Christminster の spirit の方は、Jude が死ぬまで手離さなかったギリシャ語やラテン語の書物を、仕事の合間に寸暇を惜んで読むことで、彼は充分享受していたのである。

G) とところで当時、こうした職種の青年が、仕事そのものに意義を見い出せるとしたら、それは何だったのか。Hardy は作中で Sue の口を通して ‘railway stations, bridges, theatres, music-halls, hotels’ (V.vi.) (駅、橋、劇場、音楽ホール、ホテル) の仕事なら、社会の因襲や柵に縛られることなく、実力本位で従事できるだろうに、と語らせている。恐らくそうした近代的な建築現場で Jude が始めから仕事に携わることができていれば、彼は石工の仕事そのも

のにも積極的な意義を見い出せたかもしれない。また何よりも職人個人の素行や私生活をあげつらわれることのない環境で仕事ができ、Little Jude (Juey) の事故も起らなかったかもしれないのである。しかし Jude は、‘I am not skilled in those’ (僕にはそういう仕事の腕がない) と答えざるを得なかった。

ここで *The Mayor of Casterbridge* (1886) の Henchard の場合と少し比較してみたい。Henchard も、野心の内容は全く異なるものの、Jude と同じく現状に甘んじない気概⁸⁾の持ち主である。彼は18歳で結婚したために若くして妻子を養わねばならなくなった草刈り職人として登場する。そして自分のことを ‘the frustration of many a promising youth’s high aims and hopes and the extinction of his energies by an early imprudent marriage’ (Ch. I) (前途有望な青年の高い目的や希望が、早婚によって挫折したこと) の被害者と見做している。彼は仕事の腕に自信があり、自分には千ポンドの価値があると公言する。そしてそれが実現しないのは足手纏いの妻子がいるからだ、と、酔った勢いで妻子を売ってしまうのである。

しかし Hardy はここで、Henchard が自分の能力を発揮できないのは、彼の考えているように早婚のせいではなくて、基本的にはこの時代に Wessex 地方でも渡りの草刈り職人の口そのものが、既に需要の無くなりつつある仕事だからだと言おうとしている。実際、Henchard は妻子と別れた後町長にまで出世したが、それは彼が草刈りの腕を存分に揮えるようになったためではなく、投機的性格の強い穀物商の仕事に手を出したからに過ぎない。投機という資本主義的農業形態には、妻子を売り払うという行為⁹⁾につながる、何か自然でないものがある。

8) Hardy は ‘unrest’ ‘restlessness’ と表現している (ex. *Jude*, pp. 91, 135, 337)。それらは概ね「不安」と訳されるようだが、むしろ、現状に甘んじないで、野心を抱く性格や状況を指すと思われる。

9) もっとも、wife sale は離婚の代用として行なわれていたという記録はあるが、作中での Henchard のこの行為は、その慣行を悪用した非人間的行為として描かれている。

Hardy は, Henchard が出世できたのは, 彼がそういう自然に反することに身を投じた結果だったと言っているのである。

更にその後, Henchard 以上に抜け目がなく, 科学的知識を持った Farfrae が登場するに及んで Henchard が敗北し, 彼は人生の最後には, 自分がかつて非人間的であったことを認めていくという物語の展開を見れば, Hardy がこれらの反自然なことを肯定していないことは明らかである。つまり Hardy は, 機械の導入によって, たとえ腕が良くても草刈り職人の口そのものが奪われていく農村地帯を背景にして, そういう時代の転換期に生じた一つの悲劇を書こうとしているのである。

Jude の場合も, ゴシック建築修復が専門の石工の職に就かざるを得なかったことが, 彼の後の悲劇の一つの要因である。何故なら時代は, 'That's [the railway station is] the centre of the town life now. The Cathedral has had its day!... it is played out now...' (III.i.) (今は駅が町の中心だ。もう大聖堂の時代ではない) と Sue が鋭く指摘するように, 近代建築中心に推移しているのだから, Jude の「出番も終わっている」のである。勿論 Jude は, 主人公が自分の仕事は時代遅れだと自覚する故の悲劇ではない。Jude は初めから石工は自分の天職への「つかい棒」と考えていたおかげで, 石工としての仕事の内容がたとえ時代遅れであると認識させられても, そのこと自体に苦しむことはない。いわば彼にとって石工の仕事は, 他の仕事と代替しうるものである。¹⁰⁾ その上, Henchard の場合と違って, ゴシック様式の模倣と修繕の仕事そのものが, 現に Christminster にはまだ豊富にあったのである。更に Jude は, 以前には捉え損なったあの啓示——石工の仕事場こそ Christminster の再生の中心地だという啓示——を既に体得していた。従って彼は自分の時代遅れの仕事に, 口を糊する手段と割り切って従事することができたのである。「人間は自分の仕事を,

軽蔑しながらすることだってできる」というのは, そういう点での Jude の割り切り方をも示しているだろう。「石工の職に専念する」ということが, Jude にとって客観的にはどういうものであったかを, Hardy はこのように綿密に描いており, また Jude は Henchard と違ってそれを誠実にこなしたということをも示している。¹¹⁾

IV. Jude の野心

A) Henchard の野心が世俗的な出世を求めることであったのに対して, Jude の場合は, 神学者か聖職者になる夢は, それを文字通り天職と信じた純粋なものとして描かれている。つまり Henchard の場合は, 己の才覚で金儲けができ, 出世が保障されるなら, 必ずしも穀物商でなくてもよかつただろうが, Jude の場合は, 知的なことや学問に専念できる環境が最終目標であり, その具体的な職名が, 神学者であり聖職者だったのである。少年の頃から本を読むのに夢中で, Christminster には宗教と学問以外には何もないと信じたからこそ, 彼はそこに憧れた。その限りでの Jude の判断は誤ってはいなかったと言える。何故なら Sue が言うように, 'You prove it in your own person. You are one of the very men Christminster was intended for when the colleges were founded; a man with a passion for learning, but no money, or opportunities, or friends' (III.iv.)

(Christminster 大学は, 学問への情熱だけしか持たない者のために作られたものだ) というのは, 歴史的にも正しい認識だからである。しかしそこは今や創設当時の spirit が失われて, 宗教や学問は中世趣味という letter に変じ, 学寮もそれを死守する筈になっている。

この letter の特徴を, Hardy は二つの面から描き分けている。一つは近代の思想, 特に平等思想への敵意であり, もう一つは封建的思想の擁護である。

10) Cf. 'I ought to take to breadbaking' (V. vi.). 'They could go on selling cakes...if he couldn't work' (V. viii.).

11) 但し, Jude が近代建築現場の石工だったら, また別の(例えば近代的人間 Farfrae の抱えるような)問題に直面したことだろう。

B) 前者は具体的には、大学の門戸を貧乏人には開かないという形で示される。ラテン語が達者で、一人歩きの退屈しのぎに、架空のラテン語による対話が楽しめた程の Jude は、実力の点なら優に大学に入る資格があった。酔って公言したように 'What I know is that I'd lick 'em [the masters in the University] on their own ground if they'd give me a chance, and show 'em a few things they are not up to yet!' (II.vii.) (その機会さえあれば、僕は大学人を負かすことができる) というのは、Jude の客観的な姿である。

しかしその「機会」そのものが与えられるには、もう一つの資格（つまり階級の壁を突破すること）が必要である。Jude にはそれが不可能とわかった時、彼は階級という世俗の価値観が行く手を阻むからには、そこが自分の夢想していたような、学者や宗教家が学問研究に専念している場所ではないということをも、同時に見抜いた。彼が居酒屋で、居合せた大学生には一語も意味がわからない信経をラテン語で誦読してみせる場面は、Jude の気付いた学寮内の実態のパロディになっている。学寮ならぬ居酒屋で、大学生ならぬ一石工が、しかも酔った頭で易々とラテン語を朗読したのだから。学寮はこの瞬間の居酒屋にさえ及ばない、ということであろう。

Jude は後に自分のかつての夢を次のように謙虚に分析している。

The old fancy which had led on to the culminating vision of the bishopric had not been an ethical or theological enthusiasm at all, but a mundane ambition masquerading in a surplice. (III.i.)

(結局は、勝手に学問への夢だと思っていただけで、本当は世俗的な出世志向と変らなかったのだ。)

だからこそ、純粋な学問そのものを求める Jude は、'I wouldn't begin again if I were sure to succeed. I don't care for social success any more at all' (II.vii.) (社会的成功を求めているのではないから、たとえ入学できるとしても入

りたくはない) と、本心から言えたのである。

C) しかし Christminster が、封建的な考え方や社会の因襲を支持する思想の発信地でもあるという側面には、Jude はなかなか気付かない。彼はそこは、現実には世俗の価値観に汚されているにせよ、本来は高邁な学問研究がなされ得る場所だと考えている。また、そこで蓄積された思想や宗教は神聖だと考えている。Christminsterこそ、彼の生き方を承認しない思想の震源地であるのに、Jude がこのようにいつまでも幻想から覚められないのは、石工としてゴシック建築を長く信奉していたのと同じく、この思想がキリスト教の信仰と深く結びついているからである。

従って彼は今度は、大学で学問を修めないやり方で聖職者になることを志し、再び独学で神学の勉強に力を注ぐ。今回は 'he could not in any probability rise to a higher grade through all his career than that of the humble curate wearing his life out in an obscure village or city slum' (III.i.) (片田舎か都会の貧民窟で、副牧師として生命をすり減らすのがせいぜいだろう) と考え、それが世俗的な野心ではないことをはっきり確認した上での再出発である。Hardy はこうした副牧師の生活を、例えば短編小説 'A Changed Man' でも描いているが、それは確かに、Jude のように、強い信念と私利私欲を離れた熱意に支えられてでもないければ、決してやってみたくなくなるような仕事ではない。しかしそういう惨めな副牧師でさえ、客観的には 'a professor of the accepted school of morals...a propounder of accredited dogma' (IV.iii.) (公認の道徳や教義の唱導者) なのである。つまり Christminster から発せられる封建的思想の、底辺での支え手なのである。この時点の Jude は、信仰のヴェールに目隠されてまだそのことに気付くことができていない。

しかし、Sue への愛と、性愛を罪とする宗教との間には、明らかに矛盾があり、Jude にとって前者の感情の方が自分に正直な気持であるという発見が一つの転機になって、彼は今度は自ら進んで聖職者への道を放棄する。この時も

Jude は、自分が墮落したために宗教家になる資格がないのだと、一応は謙虚に考えるが、一方で、自然な感情を罪惡視する方が間違っているのかもしれないとも考えている。そして先に見たように、キリスト教への徐々に蓄積された不信感や疎隔感によって、遂に Jude は宗教の方こそ問題がある、と気付く。彼は Sue と駆け落ちした後、*'The Church is no more to me. Let it lie! I am not to be one of "The soldier-saints..." (IV.v.) (教会なんか放っておこう。僕は伝導者になるようには出来ていない)と明言している。つまりこの時点で Jude は、Christminster の思想もはっきり批判することができたのである。*

Hardy はここでは「思想と宗教」を一応分離し、宗教の方をより厳しく批判していると言える。しかし同時に、Jude が最初に目指した絶対純粹の、無色の学問そのもの、というものもあり得ないと、Hardy は言おうとしている。思想が宗教という形をとればなおさらだが、そうでなくてもどんな学問も中立ではあり得ない。それは spirit としての学問研究から出発した創設期の Christminster に於てさえ言えることである(むしろ創設期は、宗教と直結していた)。学者、神学博士、主教というのは、Jude にとっては学問に専念できる仕事の単なる具象名に過ぎなかったが、実態は、後に Jude も見抜いたように、彼らの世俗的地位を示す名称である。彼らの思想は当然、それぞれに社会的性格を帯びている。例えば彼らが Jude を決して大学内に受け入れなかったことは、彼らの特権者意識や彼らの学問の排他性を露骨に示している。

しかし、だからといって Hardy は、学問や知的探求心を否定しているわけではない。Hardy は、社会的性格を持たざるを得ない学問の、中味が問題だと言っているのである。それは一言で言えば、*'contributing...to the general progress of his generation' (I.ix.) (時代の進歩に寄与する) かどうかで測られるもの*と言えよう。Jude が息子 Juey の将来について、彼を大学へ入れる希望を持ったり、また息子に直接 *'perhaps you'll study in [colleges] some day' (VI.*

i.) (お前もいつか大学で勉強することになるよ)と語ったりする場面が描かれているのは、学ぶべき価値ある学問があるはずだという Hardy の認識を示している。¹²⁾

Jude はこの点でも不運だった。何故なら向学心と知識の点では彼は誰にも負けず、大学人の専門の分野で彼らを「負かすことができる」だけのものを身につけていたが、中味は Jude の場合も勿論無色ではあり得ず、彼らの専門の分野の知識に過ぎないからである。Jude の12年に及ぶ学問に励んだ経歴は、結局彼をそうした分野に縛りつけてしまったのである。それはちょうど、Jude の石工としての腕が、近代建築に向かなかったのと同じである。

しかしそれでも Hardy は、対照的な Sue を描くことで、Jude の学んだ知識にも意義を与えている。Sue は *'You shan't learn!' (VI.ii.) (汝、学ぶ勿れ)* という幻聴を聞き、学問そのものを否定する。そもそも文明を否定していた Sue は、結局最後は封建時代の迷信深さへ逆戻りして行くのである。それに対して、死ぬまでギリシャ語やラテン語の本を手離さない Jude の姿は、Jude が学問や知識に憧れたこと自体は Hardy が肯定しているということである。

V. Arabella との Jude の関わり

A) Jude が19歳の時結婚した Arabella は、学問を究めるといふ彼の最初の野心を妨げた者、と見做されることが多い。Hardy が初版の序文で、*Jude* のテーマとして挙げている *'a deadly war waged between flesh and spirit; and... the tragedy of unfulfilled aims' (肉と霊との死闘と、遂げられなかった志)* という部分を Arabella に当て嵌めて、大筋として「先ず Jude は Arabella の肉の誘惑に陥ったために、大学に入るという目標に向って読書に専念していた生活が中断され、その後別れてからも、Jude は彼女に再三誘惑されて、遂に最後にもう一度彼女と結婚し直す破目になって、Jude は死を迎えることになる」と解釈されるのである。

12) Juey が大学に入ることが実現しない、というところにも、Hardy の現状認識が現われている。

しかし Arabella が実際に作中で果している役割は、当時の結婚制度が内包する社会的な問題と深く関わるもので、それが Jude との個人的な関係を通して描かれているのである。

確かに Arabella は、学問に専念するという Jude の志を全く理解できない女性で、Jude も結婚生活によって暫くは大志を打ちのめされたかに見えたけれども、現実には彼女はその内容に決して決定的なダメージを与えなかった。そもそも Jude が Arabella にひかれて横道に逸れたのは、期間としても二カ月足らずだった。Jude は最初に彼女に出会って約三カ月後に結婚したのだが、結婚後も、読書については量が減ったにしろ、仕事の行き帰りに歩きながら読んでいるし、彼らの別居の原因になった喧嘩の発端も、Jude の大切な書物にあった位だから、Jude は焦りながらもこの間、勉強は続けることがわかる。だから Jude が Christminster によく足を踏み入れるのに、その後約三年かかったのは、彼が早くに Arabella と結婚したせいではなくて、それまで徒弟奉公の期限が切れなかったからに過ぎない。

Jude が結婚のために所持金を使い果して、貯金が無かったことは、あるいは幾らか Jude の計画に支障を来したかもしれない。が、それでも、金を払って入学するためには、‘at the rate at which, with the best of fortune, he would be able to save money, fifteen years must elapse’ (II.vi.) (お金を貯めるのに、うまくいっても15年にかかる) というような多額の金額では、Jude の半人前の徒弟時代の給料など、始めから問題外であろう。

B) しかし Jude が, Arabella と結婚したこと自体は、その後彼が学問を追求する計画とはすっかり縁を切った後も、大きく Jude を拘束する。従ってこの第一部の, Arabella との関係が描かれた部分は、次の Sue の場合と同じく、結婚のテーマを考える上でこそ重要なのである。

彼らの結婚の経緯は次のように描かれる。Jude と結婚したいと思った Arabella は、友人に入れ知恵されて Jude を誘惑し、肉体関係を結んでしまう。友人が教えたのは、‘Nothing

venture nothing have’ (I.vii.) (虎穴に入らずんば虎子を得ず) ということだったからである。つまり妊娠したという既成事実を作ってしまうば、Jude のような真面目で女性の名譽を重んじる男性なら、それが確実に結婚に至る道である、ということだった。いわゆる shotgun marriage である。

これは友人によれば、多くの娘達がそうしており、そうでもしなければ彼女達は結婚などではしない、というのである。作中にもその実例が他に一組、具体的に描かれている (V.iv.)。実際 Arabella の両親も、二人を結婚させた牧師も、この場合は Jude が彼女と結婚するのが当然だと考えている。つまりそれは世間が承認している慣例なのである。

これに対して Jude 自身は、次のように二点から疑問を抱く。先ず、‘when effects stretch so far she should not go and do that which entraps a man if he is honest, or herself if he is otherwise’ (I.x.) (男が誠実なら彼を罠に掛け、男が誠実でなければ女自身を罠に掛けるようなことを、女は初めからすべきでない) ということ、もう一つは、そもそも ‘There seemed to him, vaguely and dimly, something wrong in a social ritual which made necessary a cancelling of well-formed schemes..., because of a momentary surprise by a new and transitory instinct’ (I.ix.) (束の間の本能に従ったからといって、長年の計画を棄てさせるような社会の慣例の方に、問題があるのではないか) ということである。

この二つの Jude の抗議のうちでは、勿論後者が本質的なものである。何故なら、果して Jude はその社会の慣例を守る人物かどうかという点を、Arabella 達が先ず始めに慎重に見極めようとしたことから明らかなように、もし後者のような慣例がなければ、もともと前者のような冒険をする女もいないからである。従って Hardy はここで、そういう社会的慣例そのものを問題にしていることがわかる。

またこの場合は Arabella が、その慣例を悪用したケースなので、女が男を陥れたという印

象が強い。それは結婚後に判明する Arabella の前歴や人工的なえくぼやヘアピースなどの露見によって、一層 Jude が一方的に騙されたかのように思わせる。しかしこれは自業自得とは言え Arabella にも期待外れの結婚だったのであり、問題は、‘having based a permanent contract on a temporary feeling which had no necessary connection with affinities’ (I. xi.) (結婚の基盤を、相性とは必ずしも関係のない一時的な感情に置くこと) 自体が、男にとっても女にとっても、正しいのかどうかということなのである。

Jude と Arabella は、それを正しいと見做す社会の慣例によって、たまたま近くに住んでいたという以外に何の共通点もないのに、¹³⁾ 生涯の結び着きが生じてしまったのである。ここには後に一層深く追究されることになる、結婚に関する社会の慣例や因襲の不合理性の、最初の指摘を認めることができる。

C) ここで、Arabella が妊娠したという、彼らの結婚の直接の理由が、実際には彼女の思い違いに過ぎなかった点について少し考えてみたい。

Hardy はこの部分について明確には書いていないのだが、Arabella が Jude に妊娠したことを告げる場面で、果して彼女は後に断言しているように、本当にそう思っていたのか、それとも友人達が推測しているように、そう打ち明けた時既に、何でもないと知っていたのだろうか。最初 Arabella は Jude と肉体関係を持った二カ月後に、‘Arabella seemed dissatisfied; she was always imagining, and waiting, and wondering’ (I. ix.) (彼女は不満そうで、常に空想し、待ち、いぶかっていた) と書かれている。彼女が「空想し、待っている」のは、勿論妊娠したという確かな徴候である。これは彼女が始めから「虎穴に入る」つもりだったのだから当然である。しかし、彼女は「不満そうで…いぶかっていた」とも書かれているから、この

時点で彼女には確信がなかったことがわかる。しかし偽医者 Vilbert と出会って、何事か教えられ、彼女はそれまで gloomy だったのが、顔色が晴れた。そしてその日の夕方、別れ話を持ち出した Jude に、彼女が涙ながらに妊娠の事実を告げたことになっている。

この経緯で見ると、Arabella は最初は、Jude を騙したくなかったからこそ妊娠の徴候を待ち受けたのだと見做せる。彼女は、そのふりをしたという友人の非難に対してはきっぱりと否定しているが、それは恐らく彼女の本心からであろう。しかし焦った彼女が Vilbert に相談した時、彼は彼女を安心させたのである。‘Doctor Vilbert thought so’ (I. x.) (Vilbert 先生もそう考えたのよ) と、後に彼女は Jude に弁解している。恐らくその偽医者は、‘患者’の聞いたがっている診断を下してやっただろうし、彼は更に、万が一はつきり間違いだとわかる前に Jude に打ち明けた方が賢明だ位のヒントを、彼女に授けたかもしれない。この医者は一度、少年時代の Jude を騙して約束を守らなかった人物である。彼が不誠実な人物であることは読者にはわかっているのである。この後も小説を通して彼は幾度か登場し、最後に Arabella が、Jude の死んだ後に手に入れるべき、夫の第一候補として目を付ける人物ということになっている。こうした後の Arabella と Vilbert との関わりを考えても、ここでの二人の共謀は不自然な設定ではないと言えよう。

彼女の妊娠誤認が上のように描かれているとしたら、それによって Hardy が意図したことは何だったのだろうか。結果的にそれは、Jude にとって（彼自身直観したように）確かに幸運だった。現に Arabella が Jude に見切りをつけて、彼の元から去るということが起こり得た（この時子供が生れていれば、これは難しい）。従ってこれは第一に、後の小説の展開上必要な設定なのではあるが、しかしこれは Jude が、たとえ理不尽なものでも社会の慣例を守る誠実な男であったために、陥らなくてもよい罠に捕えられたという印象を強める。つまり実際に Arabella が妊娠していたのなら、Jude の主

13) Cf. ‘a woman for whom he had no respect, and whose life had nothing in common with his own except locality’ (I. vii.).

張——「結婚の基盤を、相性とは必ずしも関係のない一時的な感情に置くこと」は間違いだ——には、彼らの子供の存在によって（Henchard の場合のように）また別の要素が派生してくるが、そうでなければこの Jude の主張をこの局面だけで考えることができる。そしてこの、本来しなくてもよかった無駄な結婚の不合理性が強調されることになるのである。¹⁴⁾

D) Jude が最後に Arabella と再婚することは、Sue が Phillotson の元へ戻ることと平衡した出来事であるが、同時にこの部分は Jude の最初の間違った結婚を拡大して示すというパロディにもなっている。今度も Arabella は社会の慣例を悪用し、Jude が彼女と結婚せざるを得ない状況を作り出す。つまり Jude を酒に酔わせ、彼女と三・四日同居したという既成事実を作るのである。最初の時は Jude は彼女の魅力によって理性を無くしていたが、今回は酒に酔わされて同じく理性を無くしている。最初の時には Arabella は母親に一晩家を空けてくれるように頼んだが、今回も彼女は父親に、夜遅く酔った Jude を家に連れ込むために、家の戸口を締めないでおいでくれるよう頼む。Arabella に囚われて無力な Jude の様子が、どちらの場合も髪を切られた Samson になぞらえられている（(I.vii.) と (VI.vii.)）。この二度目の結婚は、ただ Jude が社会の慣例に従ったに過ぎないという点が、グロテスクなまでに強調されている。

Jude はしかし今回は、これが事の本質と何の関係もないとはっきり認識している。従って Jude は再会した Sue に向って駆け落ちを提案することもできるし、自分の二度目の結婚についてはこう断言している。

If there is anything more degrading, immoral, unnatural, than another in my life, it is this meretricious contract with Arabella.... (VI.viii.)

14) 但し、この結婚によって後に生まれた Juey は、*The Mayor* の Elizabeth-Jane 同様、自然の爲すことは無目的であるという Hardy の主張の一例である。

（僕の人生の最も大きな間違いは、Arabella と、この淫らな契約を結んだことだ。）

そして今回の契約と同じく、最初の Arabella との契約も、自然に反する淫らなものだったのだと Hardy は言おうとしているのである。社会的には Arabella と Jude との結婚こそ、一回目も二回目も法に則った正当なものだったかもしれないが、実体としては、最も卑しいものである、ということである。

VI. Sue と Jude

Hardy はこの小説で、Jude と Sue のように似た者同士の結婚こそ、本来の人間的なものであるということを描こうとしたのである。従って Jude と Sue とは、自分達には勿論、他人の目にも、まさにお互いが相手のために存在しているとしか思えない二人として描かれている。¹⁵⁾

このように Sue の場合は、Arabella の場合と違って、先ず Jude との同一性が彼女の本質である。だから、基本的には Sue の特徴は Jude の特徴であり、二人の違いはあくまで同質性の中での違いに過ぎない。従って Sue は、女性としての特徴は Arabella と対照的な側面が強調され、Jude と一緒に居る時には Jude との微妙な違いが強調されて描かれていることになる。もともと Sue は Jude に比べて、実践が理論に伴わない傾向があるため、この Jude との微妙な違いが弱点となって、彼女は結局社会の因襲に負けてしまうことになるのである。

A) Jude に会うまでの Sue は、彼女自身や大伯母や Mrs. Edlin が語る幾つかのエピソードを通して示される。そこでは Sue が、Jude といとこ同士であること、両親が不幸な別れ方をしたことなど、二人はよく似た境遇に育ったことが示されている。特に、少女時代の Sue が少年期の Jude と同じ種類の感性の持ち主であった点が強調されている。更に彼女は活発な性質と都会育ちのせいで、女性が自活すること

15) 例えば Phillotson の目を通して (IV.iv.), Arabella の目を通して (V.v.)。

を当然と考えている。この点こそ、女の安定した生活といえば結婚という手段しか思いつけない Arabella と、¹⁶⁾ 最も対照的に描かれている点なのである（二人は肉対霊の対照性だとしばし解釈されるけれども、そうではない）。

B) しかしそうした自立心の強い Sue でさえ、幾つかの点ではやはり社会の因襲的考えに染まっているのである。その一つの例を、Hardy は Sue と Jude との最初の出会いの場面を通して次のようにうまく描いている。

最初 Jude は Sue がてっきり敬虔なキリスト教徒に違いないと考えていた。というのは、Sue は教会用装飾品に飾り模様を付ける仕事をしていたり、彼女を Jude は教会で見掛けたりしたからである。だからこそ Jude は、益々 Sue にひかれていくにもかかわらず、それだけ一層彼女に積極的に近づけない。自分が Sue に対して抱く感情はキリスト教徒の観点からは正当ではあり得ず、もし Jude は既婚者であると Sue が知ったら、決して自分と親しくはしてくれないものと思い込んでいるからである。

従って偶然のおかげで、Sue からの働きかけによって二人が初めて会うことになり、Jude が出会いの場として指定した、殉教の地点を示す十字架の印の付いた場所に二人が近づいた時、Sue がそこは不吉だからと、少しずらせた場所へ変更させたけれど、それを Jude はほとんど気にしていない。キリスト教徒なら、そうした連想は当然だったと Jude は考えるからである。

しかし、Sue が本当は Jude の考えているような正統派のキリスト教徒ではないとわかっている読者には、これはかなり大きな意味を持つ出来事である。¹⁷⁾ つまり Sue は、頭ではキリスト教を厳しく批判しているが、実際の感情は

必ずしもそれに伴わず、迷信深いところがあるということが示されているからである。一方の Jude は、意識的には信心深いキリスト教徒だが、その Jude の方が却って、信仰の中味とは直接関わりのないそういう史蹟に、史蹟以上の意味を認めていない。彼には、長い間夢想してきた Sue との出会いが実現するという実質的なことが重要なので、そこがたまたま異端者の殉教の地かどうかというのは、あくまで非本質的な問題に過ぎなかったのである。

ところがそういう外装を取り除けた、純粹に二人に関わる話題になると、途端に Sue は友達同士のように気さくに、一方の Jude はあたかも恋人同士のようにはにかんで、会話を始めたと書かれている。このように、非本質的なことにこだわる癖に本質的な問題では虚勢を張りたがる Sue の弱点を、Hardy はここでうまく描き出していると言える。

C) Sue の過去のエピソードで最も重要なのは、彼女が18歳の時 Christminster の大学生と知り合い、彼が卒業した後二人がロンドンで15カ月同居した、という件である。この間に Sue は多くの知識と物の見方、特にキリスト教に対する批判的見方を身に付けたと言える。この論説委員だった男は Sue を愛人にするつもりだったが、Sue は彼を愛していなかったから決して身を任せることがなかった。そのため（ではなかったと Sue は言っているが）、彼は結局病気になって死んでしまったのである。Sue は、他人の目にはこれは自分が sexless な人間であることを示していると見えるらしいと言い、これを聞いた Jude も、それは Sue の 'curious unconsciousness of gender' (III.iv.) だと考える。¹⁸⁾ そして多くの批評家達も、このエピソード

16) Arabella のこうした側面は、必ずしも Arabella 個人の責任とは言えず、田舎にのみ暮して来た女達、例えば Arabella の友人達や、Tess Durbeyfield の母親 Joan も、同じような考え方でできない女達として描かれている。

17) Hardy は前述の短編小説 'A Changed Man' でも、同じような場面をヒロインの心理を示す重要な場面として使っている。

18) この Jude の反応は、後に Sue が、Jude の結婚歴を聞いて発作的に Phillotson との結婚を決めてしまうという反応と、対照的であると言える。また *Tess of the d'Urbervilles* に於て、Engel Clare が Tess からよく似た打ち明け話を聞いた時の彼の反応とも対照的である。Jude は、過去のことはもう済んだことであり、現在の Sue の気持が問題だと考えようとしているのである。つまり Jude にとっては過去は letter であり、現在こそ spirit なのである。

ドを Sue のそういう側面を示す根拠だと位置付ける。しかし果して Hardy はそういうものとして描いているのだろうか。

Sue のこの行動は、実は彼女が後に Phillotson と結婚した後で彼女が言い出して暫く実行したこと、つまり家の中で別居することと内容的には同じものである。その時 Sue は Jude に次のように訴えている。彼女は夫を尊敬はしても愛することができず、'What tortures me so much is the necessity of being responsive to this man whenever he wishes' (IV.ii.) (この男が望む時はいつでも応じなければならないのは、まさに拷問だ) と。従って家の中での別居は、この拷問への Sue の考えた対抗策なのであった。

しかしこれが本当の解決策にならなかったことは、その後 Sue 自身が窓から飛び出したことによって、更には Phillotson との家庭から飛び出したことによって、証明された。つまりこの種の拷問は、Sue と Phillotson との同居そのものが解消されない限り、終りにならなかったわけである。

しかしそれでも、この時の Sue のとった対抗策が、Phillotson も同意せざるを得ず、緊急避難として有効だったことも事実である。何故ならそれは、愛のない結婚のために現実に派生する拷問からの、一時的にせよ実質的な解放だったからである。その限りで Sue の提案は、合法的な結婚という名の下で、「男が望む時にはいつでも応じなければならない」という拷問への批判になり得ているのである。つまり Phillotson が、それでは何のために結婚したのかと言うように、結婚が拷問になるなら、その結婚そのものが間違いであるということへ、問題がつながるからである。

しかしロンドンでの論説委員との sexless な同居は、そういう拷問を避ける道が他にあるのに、そちらを追求せずに、一足飛びに拷問そのものを問題にする類のものである。この拷問は確かに、上で見たように後に Sue 自身が経験することであり、また Sue が述べているように ('I daresay it happens to lots of women'

(IV.ii.)) 「たくさんの女の身に起っている」ことであり、いわば多くの結婚の実態でもあっただろう。Sue はこの結婚の実態 (拷問) に、ここで理屈上対抗しているつもりなのである。だからこれは、拷問の極端な裏返しになっている。つまり '結婚という名の合法的な同居なら、愛がなくても「男が望む時はいつでも応じなければならない」という実態に対して、'法に拘束されない同居で、どんな時も決して男の望みに応じない' というものである。

しかし、sexless な同居 (又は家の中での別居) という手段は、先程 Phillotson との場合に見たように、本来、結婚 (同居) そのものに問題がある場合の緊急避難なのであった。つまり結婚という名の合法的な同居と、愛情による自然な衝動に基づく関係とが合致せず、男にせよ女にせよどちらかに拷問になる場合に、本当は結婚そのものの解消が解決の道であるが、それが不可能なら取り敢えず一時ここへ逃げ込んでおくというだけの方便である。

従って Sue は先ず、論説委員と同居する前に、愛情の有無を、より正確には愛情の有無だけを、考えねばならなかったのである。しかし彼女は彼を愛していなかったにもかかわらず同居した。ここに、このエピソードでの Sue の根本的な誤りがあるのである。他のことはこの誤りから派生するささいなことに過ぎない。例えば彼女の sexless な態度も、彼女はもともと彼への愛情が無いのだから、愛情による自然な衝動も起こりようがなく、またそれを理解することもできず、従って Sue はこの同居では決して苦しまなかったのである。

このエピソードは Sue の正義感や潔癖さの弱点をよく示している。確かに Sue が実行したこと、つまり愛が無いから決して身を任せないということは、その局面では全面的に正しい。しかしそれは、同居する前に考えるべき問題を棚上げにしたことを示しているに過ぎないのである。つまり Sue は先ず、愛が無いから '同居しない' と考えるべきだったのである。

このロンドン時代のことについて、後に Sue は、'how bad I was' (III.i.&iv.) ということを、

Jude は知らないのだという表現で仄めかしている。彼女は自分のどこが「悪かった」と言っているのだろうか。彼女は Jude の目から見れば悪い人間ということになる、と言っているのである。この時期の Jude は熱心なキリスト教の信仰者だった。だから Sue は、キリスト教の教義によれば、またそれに基づく社会の慣例によれば、教会で合法的に結婚していないのに異性と同居した点を、悪いことだと言っているのである。しかし彼女はこの時、一方で信仰や慣例など何とも思っていないのだから、内心では少しも悪いことをしたとは思っていないわけである。勿論彼女のこの認識も全面的に正しい。しかし、確かに合法的か否かなどはどうでもよいことだが、彼女は愛が無いのに同居したこと自体は、反省すべきであった。

このように、愛が無いのに同居したことが間違いであったにもかかわらず、そのことへの反省が全く無く、唯その誤った状況から生じる不都合に対して、決して身を任せないという強硬策で応じたことをもって、自分の感情に忠実だったと考えている Sue は、このエピソードが与えてくれる教訓——愛ある同居こそ自然な関係だということ——をつかみ損なったのだと言えよう。

D) 後に Sue は、この手を何度でも使うだろうとその論説委員が予告した通り、Jude に二度その手を仕掛けた。一度目は、彼女が Phillotson と結婚する直前に、Sue によって花嫁引渡し役を割り当てられた Jude が、自分の下宿を十日間提供した時である。この奇妙な期間の初めのうち、Sue は何とか落ち着いた様子を見せていた。しかし結婚式当日の朝には Sue も切羽詰って、何度も Jude を愛しているという本心を表わしかけている。特に、いよいよ Phillotson と馬車に乗り込むという瞬間には、Jude には次のように直感できる程だった。

Jude wondered...whether it were that she had miserably wished to tell him of a love that at the last moment she could not bring herself to express. (III.viii.)

(彼女は、彼に愛を打ち明けたいとひどく望んだ

のに、最後の瞬間に思い止まってしまったのではないだろうか。)

つまりこの時の Sue は、Jude を愛しているにもかかわらず、その Jude と結婚するのではなく、別の男と結婚しなければならないという矛盾に、相当苦しんだのである。

この点で、Jude との sexless な十日間の同居は、ロンドンでのかつての経験とは違うけれど、それでもまだこの時点では、Sue は、愛に裏打ちされない結婚は拷問になるということを充分に予知できずに終わっている。

しかしこの時の感情的な苦しみは、結婚後現実に拷問へとエスカレートした時、それが結局 Sue を正しい選択へと向かわせた。Sue は Phillotson の元から主体的に去ったからである。Sue は自分がとろうとする行動の正当性について、Jude に次のように訴えている。

It is none of the natural tragedies of love that's love's usual tragedy in civilized life, but a tragedy artificially manufactured for people who in a natural state would find relief in parting! (IV.ii.)

(今の世の結婚の悲劇の多くは、もしすんなり離婚できるものなら、起こらなくても済むものだ。)

つまり結婚という合法的な結び付きでも、愛情が無くなれば離婚することが許されるべきだ、そうすれば多くの結婚に纏わる悲劇も起こらなくても済むと言っているのである。その他この時期の Sue の主張や論理の多くは、実際の体験から引き出されたものであるだけに、どれもそれぞれに説得力がある。例えば「もし後世の人々が、私達の時代の野蛮な習慣や迷信を振り返ってみたら、何と云うことでしょう」と社会の後進性に憤慨している前述の Sue のせりふも、この時期のものである。

その点ではこの時期の Phillotson の考え方(別の男を愛しているなら、Sue は自分の元から出て行くのが、正しい結婚の倫理であると本能的に感じる考え方等)にも、Hardy の主張が色濃く反映されている。但し Phillotson は後

に、Sue との離婚訴訟の時の事実誤認を盾に、離婚無効の訴えを起こすというように変っていく。が、その時も彼は事実誤認はささいな問題に過ぎず、ただ自分が社会的に惨めな生活から抜け出したいがために、自分は本能が教える正しい倫理を押え込もうとしているのだと直観している。ということは、Hardy はここでも、Phillotson の本能の方を是としていることがわかる。

E) Sue が Jude の元へ逃れて来た時、Jude にとって二度目の、Sue との sexless な同居が始まる。Jude はこの時には既にキリスト教への信仰心を無くしていたし、Arabella とは形式的にも（つまり正式に）離婚できる見込みもついていたので、彼は当然、このまま Sue と同棲するつもりだった。Jude にとってはそれが合法のか否かは最早二次的なことではあったが、それでも彼は正式に結婚の手続きもとろうとしていた。

しかし Sue は、自分はそんなつもりではなかったと一蹴し、Jude も従わざるを得なくなるのである。この時の Sue はかつてのロンドン時代の Sue と同じような残酷さに戻っているわけである。

それはまた、今回の出来事を Sue がどう捉えているかをよく示している。一方の Jude にとっては、Arabella との結婚の事実が、Sue と一緒になることへの唯一の障害だったから、単純に、Arabella との離婚は Sue との結婚とイコールの関係にある。しかし Sue にとっては Phillotson と別れることと、Jude と一緒になることとは必ずしも同じことではない。もし当時の社会で、Sue が離婚した後でも一人で暮していける客観的な条件が存在していたら、彼女はそれを選んだかもしれない。つまり Sue にとってはこの Jude との駆け落ちは、Jude と一緒になるところに主眼があったのではなく、Phillotson の元から逃げるところに主眼が置かれていた。つまり Sue は以前 Melchester の師範学校で監禁された部屋から逃げて、Jude の元へやって来た時と全く同じように考えているわけである。

更にこのことは、Phillotson の元から逃れるという肝心なことが成し遂げられた安心感から、彼女が再び非本質的なことにこだわりを見せ始めていることをも示している。先ず Sue は 'If there had been a rope-ladder, and he had run after us with pistols, it would have seemed different, and I may have acted otherwise' (IV.v.) (もし Phillotson がピストルを手に追い駆けて来るというのだったら、私も違った風に行動したかもしれない) と言って、Phillotson の反応を自分の行動の基準に据えようとしており、主体性を無くし始めている。つまり Sue は、Phillotson が思いの外物わかりよく Sue の出て行くことに同意してくれたことで、逆に彼に申し訳ないと感じ始めているのである。従って Sue はここで、自分の本心に忠実に Jude と一緒になって幸せになることに対して、一種の後ろめたさを感じている。

しかし今回の件は、Sue が Jude と愛し合っていることを確認した後の出来事であり、単に Sue が Phillotson の元から逃れるというだけのことではなかったのだから、Sue が Phillotson に感じる負い目は、Jude を苦しめることになった以外には、Sue の自己満足でしかなかったと言える。このようにここでもまた Sue は、物事の本質的でない点にこだわって、結局、Jude と愛し合っているという本質的なことを軽視してしまったわけである。

Sue のこうした考え方は、Jude が指摘するように、かつて Phillotson と結婚したこと自体の動機の一つでもあった。つまり Sue は Phillotson を不当に扱ったという後悔の念から、その償いとして彼と結婚したのだった。しかし結婚はお互いの愛情の有無にのみ左右されるべきなのだから、これは Sue の Phillotson への安易な同情以外の何ものでもなかったことは明らかである。Sue はそうした結婚が間違いだったことを知ったはずであるのに、どこに問題があったかをここでも掴み損ったために、また同じ轍を踏もうとしている（これがまた、最後に Sue が Phillotson の元へ戻る時の、彼女の心理に、何がしかの影響を与えていることも、

否定できない)。

ちなみにこの Phillotson と Sue との結婚が, Arabella と Jude との結婚のように間違っただけであったということを, Hardy は別の角度からも描いている。例えば二人が結婚した理由は他に二つあって、一つは Jude とのスキャンダルをもみ消すためであり、もう一つは Jude が結婚していたことを長い間黙っていたことへの Sue の意趣返しであった。前者の理由は, Sue が結局社会の因襲に捕われていることを示し、後者の理由も Jude からの自立を誇示したいという Sue の虚勢を示し、どちらも本来のあるべき結婚の根拠になり得なかったことは言うまでもない。

Sue がその場の衝動に基づいて行動してしまう特徴は、後の競売で、売られた鳩を咄嗟に逃してしまうエピソードを通して、描かれている。

F) Sue が Jude と事実上結婚した後も決して正式に法的手続きをとろうとしなかったことも、letter にこだわる Sue の側面をよく示している。Sue が法的手続きに反対する理由は主に次の二点である。一点は、一旦法的に結ばれると、それが二人の結び付きを固定させ、一生それに縛られることになるからであり、もう一点は、愛情が法律によって強制されるかのように思われ、却って本物の愛情が薄れると考えるからである。このように Sue は全体として、letter に過ぎない法的拘束力をとても強いものと思っている。それは一旦合法的な結婚がなされた後では、1857年の離婚法の成立後も、現実には離婚がなかなか難しかった当時の実状に、Sue が大きく影響されているからである。

Sue はこの考えの下に、法的手続きをとるチャンスを三回共見送ってしまう。

最初の時には、Sue はその直前に Arabella と交した会話に影響され、次のように言って反対する。合法的結婚というのは男を捕える罠で、それによって女は守られることになるが、自分達にはそうした強制力や拘束力は必要ないのだと。Sue がここで言っている法の拘束力とは、合法的結婚なら不都合が起きた時も女が泣き寝

入りしなくて済むということである。Arabella が例に挙げたことも、そうした場合であった(例えば男が殴っても法律で男を押えられる、別れる時も財産をもらう権利が生じる等)。従ってこれは、Sue が恐れているように、Jude が法律によって一生 Sue と一緒に居ることを強制されることではない(例えば Henchard が間違っていたのは、Susan と別れようとしたこと自体ではなく(それは愛情が無くなれば当然の願望だろう)、その離婚の際に、妻子を家畜のように売却し、Susan の権利を無視した冷酷さにあった)。それなのに Sue は、一方が他方に非人間的振舞いをしないようにさせるための法的な縛りと、愛情が無くなっても必ずしも離婚がスムーズにできず一生縛られることを混同している。

二度目は、登記所で直前に見た二組の結婚式の有様が、法的手続きに Sue の反対する理由になった。どちらもまるで売買契約に署名するかのような恐ろしい結婚に見えたのである。しかし Sue が目にしたこの二組の結婚式は、どちらもお互いの愛情に基づかないもので、始めから結婚そのものが間違っているものである。一組は女が妊娠したためにやむなく男が結婚に応じたもので、ちょうど Jude と Arabella の最初の結婚のバージョンである。もう一組は結婚を望む女のお膳立てで、刑期を終えたばかりの男との性急な結婚式で、Jude と Arabella との二度目の結婚の予告とも言える。これらがいずれも本来なされるべきでない結婚を、形式で糊塗して強行しようとしているケースであることは明らかである。ここでも Sue は、一旦法的に結ばれたら取り消せないと考えている点で基本的に間違っているだけでなく、愛情の伴わない結婚そのものが誤りだという肝心な点に目を向けていないのである。

三回目は、同じ日に教会で見たもう一組の結婚式が、裕福な中産階級の普通の男女の結婚ではあったが、Sue には自分と Phillotson との結婚を思い出させる故に、結婚式そのものへの恐怖に捕われて、反対する。ここでも Sue は、自分と Phillotson とは愛が無いのに結婚した点

が間違っていたのだと考えずに、取り消せない契約を結んでしまった点が間違いだったと考えていることがわかる。

また三回共 Sue は、正式に結婚して生涯愛すると誓ってしまえば却って愛情が冷める、人は愛してはいけないと禁止された方が却って愛情は深まるものだと言って反対している。しかし他の条件があって始めて愛を持続できるというのでは、そもそもそういう愛情自体、主体性の無いものではないか。それにここでも Sue は法自体が愛情の深度を左右する力を持っているかのように錯覚している。

結婚の法的手続きとは（それが無くても、他人に知られていない間は幸せに暮せた Jude と Sue の実態が示しているように）、もともと、事実を社会的に追認することに過ぎない。Sue が怯えるように、二人の結びつきを固定するものでもないし、愛情を損なう足枷でもない。結婚の法自体にはそうした拘束力は一切無いのである。従ってお互いの愛情という事実が無くなれば、それに伴って当然無効になるべきだし、愛情を、事実逆天まで守ってくれるべきものでもない。いわば法は事実に応じて変化する影に過ぎない。Sue のように法を実体と捉えるなら、それは影に怯えることである。法に愛情を強制したり、離婚させない拘束力があると考えことは、影に縛られることであり、letter に殺されることである。

もし愛情の無くなった合法的結婚に離婚の自由を認めないとすれば、それは事実逆天まで拘束したり、離婚そのものを認めない社会の、因襲的な考え方が間違っているのである。Sue も Phillotson と別れる時には、そのように認識していたはずである。

後に Jude と Sue は社会（近隣の人々）を欺くためだけに、ロンドンで法的手続きをとって正式に結婚して来たふりをする。Sue がこの‘擬装結婚’に同意したのは次のように考えたからである。こうすれば社会には正式な結婚として受け入れられるが、実体としては、法的な縛りが一切無いのだから、自分達は自由なままでいられる、と。このようにして Sue は、彼らを受

け入れない社会に、自分ではあくまで抵抗しているつもりだった。

しかし Sue は、社会に承認されるように自分の方が辻褄を合わせたのだから、結局、彼女は社会の因襲的考え方に迎合したのである。その際にも、法そのものが彼らの真の関係を拘束すると思い込んでいる点で、今までと同じ誤りを犯しているばかりでなく、合法的か否かにこだわるそういう考え方自体が、社会の因襲的考えと同じものであり、それがまた自分達を迫害する原因にもなっているのだということに、彼女は気付いていないのである。ここにも、法という letter にこだわり、自ら墓穴を掘っていく Sue の姿が示されている。

G) こうした弱点を持つ Sue は、Juey が二人の弟妹を殺して自殺する不幸な事故の後で転向し、Phillotson の元へ戻るという愚行を、正しいと考えるのも不思議ではない。もともと法や社会の因襲という letter に抵抗すべき意味があると考えていた Sue には、不幸な事故の原因が、これらの letter に自分達が逆らったためだと思ってしまうのである。

しかし Sue は、当然のことながら、自分の感情を完全に偽ることはできないから、Phillotson と再婚しても、始めのうちは再び家の中で別居している。これだけでも、二人の結婚が、最初の時も今回も、letter に縛られた spirit の無いものだということをよく示している。同時に Sue がここでも、家の中で別居することの積極的意味も限界も全く理解できていなかったことを示している。Sue は今回は、彼女自身が法に拘束されていると信じ込んでいるから、最後までその積極的な意味を持つ抵抗の姿勢をすら、貫くことはできなかった。

この Sue の受ける拷問は、愛情に基づかない関係を強制されるのだから、たとえ合法的でも実体は姦淫であり、Jude の表現するように、狂信者の売春なのである (VI.iv.)。かつての Sue は自らもそう認識し (IV.iii.)、letter を無視して Jude の元へ飛び出したのだったが、今や完全に letter の、つまり形式の奴隷になった (in her enslavement to forms (VI.x.)) Sue には、

最早それを望むことはできない。

Hardy は最後に、Sue が一瞬、本心を洩らす場面を描いている。それは Sue が Phillotson の寝室に入る直前に、彼の屍が途絶えた瞬間、次のように考える部分である。‘Perhaps he’s dead! And then—I should be *free*, and I could go to Jude!’ (VI.ix.) (彼は死んだのではないかしら。そうなら私は Jude の所へ行けるわ。) ここには Sue が今も変わらず Jude を愛しているということ、しかし letter に縛られた今の Sue は、消極的にただ Phillotson が死んでくれることを願うことしかできないのだということが示されている。この時の Sue には、Alec を殺してでも Angel の後を追った Tess の‘強さ’は全く認められない。

H) このように、Sue の弱点は確かに Sue 個人の考え方の弱点から生じたものではあるが、同時に、社会の因襲が Jude よりも Sue に一層強く作用した結果だったことも無視できない。例えば教会でモーセの十戒の文字を塗り直す作業の時に、彼らは正式に結婚していないことを

もってその仕事から解雇された。しかし正式に結婚していないことを社会が承認しないというのなら、Sue と共に Jude も同罪であろう。それにもかかわらず、Jude 一人なら問題にならず、向こうから仕事の依頼が来た位だった。しかし妊娠している Sue が手伝いに加わった途端に、事情が露見して、教区の住人達が文句を付けた。これが Sue にはあたかも自分個人の責任であるかのように思えたのである。

その他、酒場経営の能力は男以上にありながら、結婚に頼らざるを得ない Arabella 達の哀れさや、彼女達の離婚後の生活の大きな不安も無視できない。女性である故に被るこうした不利な状況でさえ、Hardy が自らの小説のテーマに一応決着がつくだろうと考えた「50年後100年後」の今日も、決して問題が解決されたとは言えない。

Sue の弱点が内包するこうした問題点は一例に過ぎないが、Hardy が *Jude* を通して描いたテーマの多くは、まだ当分は有効なままであると言えよう。